
ベン・トー ~ 狩人の名を持つ狼 ~

?ハッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー 〜狩人の名を持つ狼〜

【Nコード】

N7340Z

【作者名】

?ハッピー

【あらすじ】

「俺は狼だ、最悪の二つ名を持つ」とある理由により転校することになった主人公烏丸 翔太が昔小学生のころ同級生だった佐藤 洋と再会し普通の日常を過ごすつもりだった。アイツがあのスーパーに来るまでは。

原作にどつりに話を進めていくつもりですがなにせ自分に文才が無い為自己満足の小説になるかもしれませんがもし暇であれば見てください。

プロローグ（前書き）

ベン・トーの小説を書いて見ましたが1巻を友達に貸しているので更新は、出来ませんがうる覚えの感じになるかもしれないがそのところは了承下さい。

それではプロローグをお楽しみ下さい。

プロローグ

町のどこにでもある小さなスーパーそこで今夜も戦いが始まるうと
していた。

ここは西区のホーキーマートというスーパー

そこにはものすごい威圧間を感じた。

「今日は氷結の魔女はいないのか。せつかくよく来るスーパーを調べて来たのに。今日は帰るかなでもおもしろそうな奴もいるし残るか」

そんなことをいっていると、このスーパーの半額神ことアブラ神が扉を開け出てきた。

「いよいよ始まるのか半額印証時刻。さて、この西区の実力見せてもらおうか」

俺は、胸のドキドキが止まらない。

ものすごい個性的な人たちがいるからおもしろそうだ。

アブラ神が半額シールを張り終わる。

そしてこっちをちらりと見た後静かに扉を閉めた。

「さあ狩りの時間だ」

その瞬間、狼と呼ばれる者たちが弁当に向かい飛びつく。

弁当を争う壮絶な戦いが始まった。

俺は、遠くで見ているだけだった。

「この中に二つ名持ちは誰もいないな、なら楽勝だな」

そう俺が言つと狼たちは一旦戦いをやめて俺に、ものすごい顔で顎鬚を生やした男が言つてきた。

「なんだよ、お前はこの辺ではみない顔だなあ」

「そりゃそうだよ、俺は最近このあたりに引つ越してきたんですか」

「まあいいとりあえず俺が実力を見てやるよ」

「俺に叶うと思ってるんですかああなたが」

「なにを！！」

そついうと俺に向かい飛び掛つてきた。

俺はそれを普通にかわすとなんか分からんがその顎鬚を生やした男が切れていた。

「もう怒つたぞ、ココからは本気だ」

さつきまで本気じゃなかったのかよ。

「かかつてきてくださいよ。狼さんよ」

相手は俺に向かい殴りかかつてくる。俺はそれをかわすと顎鬚に向かい蹴りを入れる。

蹴りをいれるとその男はうめき声を上げながら倒れていった。

「あれこんなけかよ」

そついうと他の狼が俺をなんか変な目で見ている。もしかしてアウエイ。

「どうしたんですか。かかつてきてくださいよ」

「行ってやるうじやないか！！」

「そつこなくちゃ。楽しい狩りの時間だ」

「おっしやー弁当は取ったし帰るか」

俺が帰ろうとすると、さつき威勢が良かった茶髪で髪が長めの女性が俺に話しかけてきた。

「あなたは誰なの？この地区の人間ではない。しかもただの狼にシテは、強すぎるほんとにあなたは何者」

「俺か、俺は烏田高校一年（仮）最近引越してきた名前は烏丸翔太だけだ」

「烏田高校？ってことはわんこと一緒に私と一緒にわんこ一体誰のことだ。」

「烏田高校だったんですか、多分先輩ですよ。それじゃあ氷結の魔女こと檜水 仙を知っていますよね。それじゃあ伝えてください、俺のことを」

「一様伝えておくけどあなたどう伝えればいいの？」

「そうだな、この名前は気に入ってるわけじゃないんだけどなまあしょうがない」

俺この名前嫌いなんだよな。まあいいか

「それじゃあいいですよ。俺の二つ名を俺の二つ名は 　　です」
その名をいうと茶髪はものすごく驚いていた。

「まさかあなたがあの二つ名の持ち主」

やっぱり驚いているだからこの二つ名はキライだ。

「ちゃんと伝えといてくださいよ。先輩」
そういつて俺は店から出ていいた。

俺の二つ名それは狼殺しの意味の「狼殺し ウルフスレイヤー」
それが俺の二つ名である。この二つ名は俺は嫌いだ、なぜならこの
名を聞くと皆が口をそろえて逃げていくからだ。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか、面白かった人はコメントを下さい。

キャラ設定（前書き）

今回は主人公である烏丸 翔太のプロフィール紹介です。

キャラ設定

名前：烏丸 翔太

二つ名：『狼殺し ウルフスレイヤー』

容姿：髪の毛が立っていて基本的な主人公の髪型で普段は、ぼーっ
としている。基本的にイケメンである。

性格：弁当争奪戦の時はまた違った表情をする。大体こわめの顔をする。性格はとても優しく誰とでも友達になれる感じの性格である。この性格ゆえに自分の大切な人が危険に去らされると我を忘れて怒ることもある。そうになったら誰も止められない。

家族：家族は父は行くえい不明 母は交通事故で死亡こんな感じのため今は、弟と妹で家に住んでいる。弁当を求めるわけは、弟と妹の為。

交友関係：佐藤 洋 著我あやめとは昔よく遊んだ。

二つ名の由来：今のところは不明

戦闘スタイル：基本的に拳と足を使った戦い方だが他にも割り箸、カゴ、カート、輪ゴムなどスーパリーにあるものをほとんど使い戦う場合もある。

好きなもの：妹と弟 仲間

嫌いなもの：仲間を傷つける人

決め台詞 口癖：「さあ狩りの時間だ」

キャラ設定（後書き）

設定はまた増えるかもしれませんが。そこんと頃は了承下さい。

第1話 友との再会（前書き）

今回は佐藤との再会あたりをやります。

第1話 友との再会

俺はめんどくさかった。学校に行くのが。

「めんどくせえな。学校」

なぜこんな面どくさがっているかと言つと。

俺は転校生である。学校に行くと職員室に行く あいさつ 教室に行く 自己紹介 ざわざわ 放課になる 質問責めにあう(個々か一番面倒だ)というわけで俺は学校に行きたくない。

職員室へのあいさつを済ませた俺は教室に向かう。

「まさかこんな次期転校生なんてねえ」

「はい、いろいろ事情があつて」

こういうことがあるから面どくさいんだよ。と心の中で思いながら俺は笑っていた。

俺は教室の前についた。

「ちょっと待つてなさい。合図を出したら入つてきて」

「わかりました」

そのぐらいもうなれてるんだよ。と心の中で思いながら俺は笑った。

「はい、静かにしろ今日は転校生がいるぞ」

「まじか！女か男か」

「男だ」

「なんだよ男かよ」

わるかつたな男だよ。

ちよと俺は切れかけていた。

「それでは、呼ぶぞ、入つて来い」

俺は扉を開けてちよつとドキドキしながら入って行って教卓あたり

で止まり自己紹介をした。

「はじめまして。このたび転校してきました、烏丸 翔太です。よろしく願います」

俺の自己紹介が終わると女子が騒ぎ始めた。

「きゃーーーーー」

「イケメンだよー!!」

「滅茶苦茶かつこいいじゃんか」

いくどとなく転校してきたが俺が入ると大体この反応だ。

俺はあきれながら教室を見渡すと見たことある顔があった。

相手もこっちにきずいた様だ。

「まさか!!!」

「まさか!!!」

「洋!!!!!」

「翔太!!!!!」

俺とそいつは同時にお互いの名前を呼び合った。

「何だ佐藤と知り合いなのか。それじゃあ佐藤お前が面倒見てやれ」

「僕ですか?」

「先生大丈夫です。あんなバカに見てもらわなくても」

「バカとはなんだバカとは」

俺と洋はにらみあった。その後なぜか

「はははは」と二人同時に笑いあった。

「変わらないな、今も昔も」

「ああそうだな」

「そんなこといってないで授業始めるぞ」

「はーーーーーい」

放課中

「ねえ烏丸君は、何所から来たの」

「どんな食べ物が好き」

「どんな人がタイプ」
また始まったよ質問責め。いつもこうだ。
あーめんどくせ

放課後

「洋どこいくんだよ？」

俺は、洋を追いかけた。

「何所って部活だよ」

「お前部活やってたのかよ！」

「まあね部活といえるか危ういけど」

「どんな部活だよ？」

「まあこれば分かるよ、一緒に来る」

「暇だし行くか」

俺は、洋についていくとちっちゃめの部屋の扉の前に来た。

「ここか？」

「うん」

洋が扉を開けると女性の声がした。

「何だ佐藤今日は早いな。そっちは誰だ」

その女性は俺が会いたい人だった。

「こいつは、今日転校してきて僕の小学時代の同級生の」

「烏丸 翔太です。よろしくお願いします」

「ああよろしくな。私は槍水 仙だ」

俺の胸は高鳴り鼓動を隠せないくらいになっていた。

「やっとあえたあなたに」

俺が小さい声で言うと洋が

「どうかした翔太」

「なんでもないよ、でこの部活何する部活なの」

そついうと氷結あ間違えた槍水先輩が

「この部は半額弁当を取る部だ」

「へえー面白そうですね、俺入部します
すると洋が

「止めといた方がいいよ。この部、危険だから」

「大丈夫だよ、ところで槍水先輩」

「何だ、烏丸？」

「今日俺とスーパードで戦つてくれませんか」

その言葉に洋が驚いていた。

「別にいいが基本、部の中では戦わないのだが」

「そうだよ翔太やめときなつて槍水先輩は強いよ」

「分かつてる。でも俺も気に入つてはいないが二つ名を持つものだ
戦いを申し込むのが当たり前だろ」

俺のその言葉に洋と槍水先輩は一瞬止まった。

「どういうこと翔太が二つ名持ちつて」

「まあそこは気にするな」

「それで烏丸お前の二つ名は？」

「はあ出来るだけいいいたくないんですけど、それとこの二つ名でよ
ばないでくださいねえ」

俺は一回大きく深呼吸をした。

「いきますよ俺の二つ名は『狼殺し ウルフスレイヤー』ですよ」

その瞬間、槍水先輩は啞然とした顔をしていた。

「お前が『ウルフスレイヤー』だったのか」

「それじゃあ今日スーパードときわで待つてますから」

俺はその言葉を言い去つていった。

「楽しみだぜ、氷結の魔女お前の二つ名伊達じゃないとこ見せてく
れよ」

第1話 友との再会（後書き）

なんかどんどん翔太がキャラ崩壊しています。
ちなみに時間列は、2かん

第2話 誇りを懸けた戦い（前書き）

ついに始まる氷結の魔女対ウルフスレイヤー勝つのはどっちでしょ
うね。

それでは第2話 誇りを賭けた戦いどうぞ。

第2話 誇りを懸けた戦い

俺は、閉店前のスーパースーパーときわに来た。

「ついにあの氷結の魔女と戦えるのか」

俺はそんなことを言いながら、棚の中の新商品のお菓子を見ていた。するとスーパーの扉が開きそこには俺の待っていた人が来た。

「来ましたね、槍水先輩いや、氷結の魔女！」

「ああ約束どうり来たぞ」

俺らが話していると聞き覚えのある声が

「洋！お前も来たのかよ！」

「なんだよ、俺が来ちゃ悪いのかよ」

「別に悪いわけじゃないが怪我するぞ」

そんなことを話しているともう一人洋の後ろに誰かいる。隠れているのか。

「ほら著莪ひさしぶりの再会なんだから」

そういうと洋は金髪の俺が良く知る女性を連れてきた。

「あやめ？もしかしてあやめじゃねえか！！」

そんなことをいうとあやめは俺に向かい抱きついてきた。

「いままで何所行ってたんだよ。小学生の時もさよならも言わずにどっか行くしと思ったらいきなり帰ってくるし。このバカ、バカバカバカ」

とあやめは半泣きで俺に言ったきた。

「その説は悪かったてもお前いい女になったな」

「うるせえ、バカ」

正直今のあやめはものすごくかわいい。

「感動の再会はさておき、もうそろそろ半値印証時刻時間だ」

「そうだな」

その言葉からちょっと時間が経つとこのスーパーの半額神ことじじ様現れた。

「ついに来ましたか半額神様」

「佐藤おまへは何を狙う」

「僕ですか僕は天井を」

「そうか私は季節の野菜炒め弁当を」

「私はから揚げ弁当を」

「俺はなんでもいいやとれるもんをとる。ただそれだけだ」

なんかいま自分でもかっこいいこといった。そう思わない洋と振り返ってみると洋は聞いてなかった。

アブラ神がシールを貼り終わるとやはりこちらをちらりと見た後扉を閉めた。

その瞬間いつせいにお腹をすかせた狼達が弁当に群がる。

それじゃあいつもの決め台詞言いますか。

「さあ狩りの時間だ」

俺はちよつと遅れて弁当の元へ行く。

普通に行けば俺は楽々弁当を取れるだが今日の目的は氷結の魔女との手合わせだから俺は氷結の魔女の元へ向かう。

「それでは氷結の魔女さん、お相手よろしくお願いします」

「来い！！」

「それじゃあいきますよ」

俺はそういうと氷結の魔女に拳を仕掛ける。

その攻撃を氷結の魔女は空中に跳び回避した。

「やりますね！」

「今度はこちら行くぞ」

そういうと氷結の魔女は俺に向かい足技を繰り出してくる。

その攻撃を俺はかわすと後ろから名もなき狼が来る。

「邪魔なんだよ、俺と魔女の戦いの邪魔をするな！」

俺はそういうとそこらにあったカゴを手に取りそのカゴで相手を叩いた。

その後男は動かなくなった。

「それじゃあ戦いの続きをするか。魔女！」

「ああそうだな」

俺はカゴを床に置き魔女に向かい攻撃を仕掛ける。

その攻撃はあつたが魔女はびくともしない。

「すごいじゃないですか。俺の攻撃を受けて平気とは」

そういうと魔女は「まあな」といい俺に攻撃を仕掛ける。

俺はそれをさつき床に置いたカゴをバネとし空中へ移動。

俺はそのまま魔女に向かい蹴りを入れた。

その蹴りは、魔女にかすった。

「やるなあ」

「そつちこそ」

そうお互いに強さを確かめると俺は満足し魔女との戦いをやめ弁当をとることに専念した。

「はー弁当も取ったしさて帰りますか」

「まて」という声やし振りかえるとそこには魔女と洋とあやめがいた。

「いつしよに部室で食べないか？」

「その誘いは受けたいんですが家でお腹をすかせた兄弟が待っているので今日はパスで」

「そうか、わかったじゃあなまた明日」

「ハイまた明日部室で会いましょう」

そういいおれは去っていくと帰り際、魔女が

「お前との戦いおもしろっかたぞ」

「僕もです」

そうして俺はこの場から立ち去った。

第2話 誇りを懸けた戦い（後書き）

次回予告

次回予告をまかされた烏丸 翔太です。

いやー氷結の魔女ほんとに強かったな、次回も戦えるといいんだけどまあ次回はあの女と戦います。まさかのあの女が二つ名持ちとはな

次回：湖の麗人

それじゃあ決め台詞でしめますか。

「さあ狩りの時間だ」

第3話 湖の麗人（前書き）

今回は湖の麗人との戦いです。
それでは、第3話 湖の麗人どうぞ。

第3話 湖の麗人

氷結の魔女戦の次の日

「んんん・んん」

俺は起床し時計を見ると針は昼をしめす。12時を指していた。

「はぁぁー！。えらい寝てたなぁ」

今日は特にやる事もないしなぁ。

「散歩でも行くか」

俺は、服装を烏田高校の制服に着替え（何となく）携帯と財布を持って外へ出た。

特に行くあてもなくブラブラと散歩していると携帯がなった。

ブルルルル

「一体誰だよ？洋何だアイツからか」

そして俺は電話に出た。

「はいもしもし洋どうしたんだよ？」

洋はあわてた口調で「大至急、丸富大学へ来て」

「それってあやめがいる場所じゃないのか」

あやめがいる高校は、丸富大学付属高等学校といい大学と高校がいつしよになっている。

「そんなことは、いいから早く来てあと服を持ってきてくれるとありがたい。じゃあ」

「おい！ちよつとまてよ」

服を持ってこいってどういうことだよ。あいつはいま何をしているんだ。

「まあいつか面白そうだし、いってみるか」

そういって俺は丸富大学へ向かう。（おもしろ半分）

「ここか、丸富大学は！」
「けっこうでかい校舎がいっぱいあった。」

そんなことを考えていると銃声が聞こえた。

「なんだ、つてか何で銃声」

銃声の聞こえた方に行ってみると見たくないものを見てしまった。

パンツ一丁の姿で銃を避けている洋がいた。

「あいつは何をしているんだ。無視してあやめのところでも行こう」

俺は、あやめに電話をかける。

ブルブル

「あやめか、いまお前何所にいるんだよ？」

「いまは丸富大学の部室塔にいるけど」

「ちようどいい、そこどこか教えてくれよ。今から行くから」

「別にいいけど何かあったのか？」とあやめは俺に聞いてくる。

あんなもん見た後、だからなあ。綺麗な物見て落ち着きたいから何

て言えないしなあ。

「まあ暇だったからブラブラしてたらここに来たからとでもいつて

おくよ」

そういつとあやめは「ふううん。わかった」といつて道を教えてく

れた。

「洋、生きてまた俺たちの元へ帰って来いよ」

俺はそういつとこの場から立ち去った。

「へえここがお前の部活なんだ。ゲームしかおいてねえけどなにやる部活なんだよ」

「ここはゲームやる部活だよ」

いやそのままじゃんか

そんなことを話していると誰かが入ってきた。

「著莪、服を！！」

そんな感じで洋が入ってきた。

「おう、翔太じゃないか。どうして僕より先に著莪の元にいるの」「それは、お前に呼ばれて丸富大学にきたら、パンツ一丁の変態がいたからこれはまずいと思ってあやめの元に連絡し、ここに来たというわけだ」

「途中で出てきたパンツ一丁の人僕だから」

「知らないよ。俺の友達にパンツ一丁で外を走りまわる人なんていないよ」

そういうと「ひどいよ。僕だって好きで（長いため以下省略）」となんかいろいろいい始めた。

そんな会話をしているとあやめが「まあまあ佐藤落ち着いて。ほら服用意してやったから着替える」

「わかったよ。つてここで!!」

「ここ以外着替える場所ないじゃんかよ」

「あやめその発言は如何なものかと思うぞ」

そういうとあやめは「えっ??」といった。

「普通に考えればお前は男の着替えを平気で見られるのか?」

「別に見られるけど。つてか佐藤じゃん最初からパン一状態なんだから関係ないっしょ!」

まあそれもそうだな。

「洋、ここで今すぐ着替える」

俺がそういうと洋はふてぶてしく着替え始めた。

「そのかつこは如何なものかと」

俺がそういうとあやめが「まあいいんじゃない」という

良くないだろうドツカラどう見ても変態じゃないか、これならパン一の方がマシだよ。

「著莪なんでこんな服なんだよ!!」

「まあいいじゃんか」

そんなことを話していると扉が開いた、洋は異常にビククってして

いた。

「あやめちゃん。いいもん持ってきたよ」

そこにはかわいらしい幼児のような子がいた。

「はい、あやめちゃん」

そういつと帽子をあやめに渡しそれを洋にかぶせる。

それはもう何所からどう見ても。変態だ！！

「だめだ、俺はもう耐えられない。先にスーパーに行っている」

そういつとあやめが「今日は東区のスーパーに皆いるから」そういつて俺に地図を渡してきた。

俺は帰り際に扉の前にいた幼児に話をかけた。

「君、名前は？」

「井ノ上 あせび」とかわいらしい声で答えてきた。

「じゃあねえ、あせびちゃん」

そういつて俺は、あせびちゃんの頭を撫でた。

そして扉から出て行き、階段を下りようとした時、一段踏み外し俺は一番下まで落下して行った

「んん・んん・ここは」

気がつく俺は、誰かの背中の上にいる。

「気がついたか。翔太」

俺をおぶっていたのは、洋だった（変な格好）

「俺に何があつたんだ？」

「お前は階段の上から下まで綺麗に転がってたんだ」とあやめが説明してくれた。

「もう大丈夫だ」そういつて俺は、洋の背中から降りる。

本音を言うにあやめにおぶってほしかった。俺は何をいっているんだ。

「おつもうついたぞスーパー」

そこは意外と大きい目のスーパーだった。

スーパーの中に入るとまず目に飛び込んできたのが巨体の男だった。

「あいつどこかで、そうだ思い出した、魔女を調べる時に出てきた、魔術師に並ぶ強さを誇る」

「帝王」とあやめがいう、俺のセリフ取られた。

そんなことを話しているとピアスをつけた男がこちらを見ている。すごい視線で。

「まさか、俺がライバルし、していた相手がまさかあんな変態だったとは」

「だっていわれてるよ、変態さん」

「誰が変態だ!!」

そんな風に洋が怒る。

「なあ洋、お前の二つ名こんならどうだ」

洋は、ドキドキしたような目でこちらを見てくる。

「変態!!」

「まんまじゃないか!!」

「やっぱ認めてるんじゃない」

「そついやーあやめお前も二つ名持ってるだろ?」

俺が言うにあやめは「うん持ってるよ」といつてきた。

やっぱはつきり行って今の声滅茶苦茶かわいい。

「アタシの二つ名は湖の麗人」

湖の麗人なんかかつといいなあ

「まあそんなことよりさあ、もうそろそろ半印証時刻だよ」

「それもそうだしもうそろそろ前の方行くか」

前の方に行くと、白粉と槍水先輩がいた。

「佐藤なんだその格好は?」

まあそりゃあ誰でも最初につこむわなあ。

「予想どうり」

白粉に行つたてはばかなのか。

このスーパーの半額神が姿を現した。

「来たぞこのスーパーの半額神だ」と槍水先輩が言う。

若い・・・しかも女性・・・しかも滅茶苦茶綺麗じゃないですか。

何となくだが洋も同じ事を事を考えているような。

「佐藤、白粉、烏丸お前達は何を狙う？」

「僕はすきやきを」

「私は勝つドンを」

「俺は天丼を」

「そうか私は、チキンカツカレー弁当を狙おう、せつかくこの店に来たのだからザンギ弁当を狙いたかったが売り切れではしょうがない」

俺はあやめの元に向かう

「お前は、何を狙うんだよ？」

「アタシはすきやきを狙うつもり」

洋といっしょか、まあ頑張れ洋、お前も変態の二つ名を持つ男だ（嘘）。

半額神がシールを貼り終わりゆっくりと扉を閉めてった。

その瞬間いっせいに弁当に群がる狼達。

さて毎度おなじみのあれ言いますか。

「さあ狩りの時間だ」

第3話 湖の麗人（後書き）

次回予告

次回予告を担当する著我 あやめだよ。

ついに本性をむき出した『帝王 モナーク』佐藤を開戦の狼煙にする。とかワケの分からないことを佐藤がやられた時、あの男が暴走し始める。

アンタは向こうで何があつたのさ。

次回 暴走

「かかつてきな、湖の麗人 著我 あやめ様が相手だよ」
ちよっと決めてみた。

第4話 暴走（前書き）

今回ついに翔太が謎の力を使います。それでは第4話 暴走お楽しみ下さい。

第4話 暴走

「さあ狩りの時間だ」

俺はその声と共に半額弁当の元へ行く。

だがやはりその行く手を狼達が邪魔してくる。

「やっぱりこうこなくちゃねえ」

俺はその狼達を倒していく1人、2人、3人と

ちよつと余裕のあつた俺は周りを見渡した。そこには魔女と戦うあやめ、ピアスの男と戦う洋、狼達を潜り抜けて弁当をとった白粉がいた。

「皆頑張ってるな。俺も頑張らないと」

そのとき「佐藤、逃げる！」という声が聞こえた。

「今の声、あやめ？」

後ろを振り返ってみると洋が床に倒れこんでいた。

「洋！！！！」

俺が近寄ろうとすると狼達がいっせいに襲い掛かってくる。

俺は、それに取り押さえられた。

洋は、何者かに首をつかまれていた。

「今宵、お前は歴史に名を刻むこととなる。光栄に思うがいい」

なんのことだよ。歴史意味がわかんねえ。

そうすると洋はかすれた声で「・・・な、に・・・？」

「その血でもって開戦の狼煙となれ」

その男は洋を掴んでいた手を離し、拳を固める。

「やめろ！！！！」

その声は届かずそして俺は動くことも出来ずに見てるしか出来ないのか。

その時、ピアスをつけた男が洋を庇った。

そして洋とそのピアスの男は吹き飛ばされた。

「洋!!!!!!!!!!!!!!」
その瞬間、俺の中の何かが切れた。

槍水 目線

私は弁当を買い佐藤たちの様子になり見に行くと佐藤が倒れていて、烏丸が押さえられていた。

「貴様っ!!」

「うるさいぞ、魔女。静かにしろ。店に迷惑じゃないか」

帝王はニヤつきながら近寄ってくる。

「何故あそこまでやった!貴様の攻撃は弁当を取るための」

帝王は話の最中、私のつかみ、絞めてきた。そしてそのまま私を持ち上げた。

「犬のような声を荒げるなよ、魔女。礼儀を用いて誇りを懸けよ、それが我々の掟じゃないのか。・・・見すばらしいまねをするなよ」
私は、必死に言おうとするがのどを絞められて呼吸がしにくいためはつきりいえない。

そして帝王がしゃべろうとした時、帝王は真横に吹き飛ばされた。

「何が起きたんだ一体?」

そうするとレジの方から麗人も現れた。

「これは一体どうなってるの?」

帝王を一撃で飛ばすほどの狼がこの中にありえない。そう思っていると帝王が飛んでいったほうと真逆のほうに一人の人がいた。その顔を見て私は驚いた。

「烏丸?!」

そうすると麗人も「翔太?!翔太なの?」

そこには、すごい視線で帝王を見る烏丸が立っていた。

「いてててて、一体誰だ、俺を飛ばした野郎は」

その瞬間烏丸は、猛スピードで帝王の元へ行く。

「うせる!!!!!!」

烏丸が放った一撃は帝王の腹に命中

「なめるんじゃねえよ！」といって帝王も殴りにかかる。

「翔太！帝王の攻撃を正面から受けたらダメ」

烏丸は、避けることもなく帝王の拳を片手で止めた。

帝王もさすがに驚き後ろに2、3歩引く、

そうすると烏丸は帝王に向かいに行こうとする。だがそれを麗人が止めた。

「もうやめよう、翔太、元の翔太に戻って」

そう麗人が言うとき烏丸は意識を失ったように麗人に倒れ掛かる。

「まさか魔女の元にそんな奴がいたとはな。少々油断しすぎたようだ。そいつに伝えておけ、「今度は本気だ」と」

そう言うと帝王はスーパーから出て行った。

翔太 目線

「こ・・・ここは」

記憶があやふや過ぎるええーとまず洋に呼ばれて丸富大学に行つて

スーパーに来て 戦つて 洋がやられて

はぁー思い出したまたやつちやったのか。

ところでここは何所だ、休憩所？

まあとりあえず起きるか。起き上がってみると、目の前に笑っているあやめ、不思議そうな顔をして見ている槍水先輩そして服で何かを一生懸命隠している洋

「変態」

そう俺が言うと

「変態とは何だ、第一起きて第一声に変態ってどういうこと」

「しょうがないだろ。だって何か起つてるし」

「いわないで!!!」

そんな会話をしていると槍水先輩が「もう大丈夫なのか？烏丸は」

「ハイ大丈夫です。どうせダメージ1つ受けてないんでしょ」

そういうと槍水先輩が「まあな」といつてくる。

「とりあえず佐藤何故立てないのだ？」

「大丈夫です。次期に起てる様になります」

「つかある意味もう起ってるじゃないですか？洋

「まあある意味でもうたってるけどね」

「あやめ、女子がそんなこと言っちゃだめだ。洋の顔を見る」

洋はものすごい目であやめを見ている。

そんなことをしていると白粉が来た。

「・・・いや、違うんだ、白粉・・・この状況にはいろいろち理由が」

そんなことを洋がいうと白粉は

「・・・全員男にすれば使えるかな」

「やっぱりこいつは分かん」

「とりあえずみんな落ち着いてきたか？」

槍水先輩がいきなり言い出す。

「烏丸聞きたいことがある」

「はあはい」

「あの力は何なんだ？」

「やっぱり俺は、あの力を使っていたんですねえ」

洋と白粉は何のことみたいな感じになっていた。

「麗人が止めなければ、まずいことになっていた」

「そうだよ、アタシが止めなかつたら大変だったんだからねえ」

俺はそういうあやめを抱きしめて「ありがとう」というとあやめは照れながら「ううん」といった。

「それじゃあ、話しますか、この力と俺が何故『狼殺し ウルフスレイヤー』と呼ばれるようになったか」

俺が話し出すと皆が真剣の目で俺を見てきた。

第4話 暴走（後書き）

次回予告

次回予告担当の佐藤 洋と烏丸 翔太です。

今回は洋がなぜ変態と呼ばれたか分かるよ。

ちがう、今回は『狼殺し ウルフスレイヤー』の謎と翔太の力について分かるよ。

次回 狼殺し

それじゃあ決め台詞行きますか。

僕決め台詞ないんだけど。

しょうがない俺のキメ台詞言わせてやるよ。

行くぞ「「さあ狩りの時間だ」」

第5話 狼殺し(前書き)

今回は何故翔太が狼殺しと呼ばれるようになったかについての話です。

それでは第5話 狼殺しお楽しみ下さい。

第5話 狼殺し

1年前のとあるスーパー

俺は、こっちで出来た友達、水川 拓と一緒にスーパーに居た。

「今日も半額弁当取るうな！翔太」

「おう俺たちにかかれば楽勝だ」

その時、俺たちの二つ名は右近・左近と言う二つ名で呼ばれていた。多分この二つ名の意味は、俺たちはいつも二人で弁当を取りに行つてたからつけられた二つ名である。

「いよいよ始まるぞ半値印証時刻が」

「そうだな、拓！」

そんなことを言っていると半額神が現れた。

こちらの半額神はスローマンと呼ばれている。その理由は、半額シールを貼るのがものすごく遅くというか動き自体が遅いためその名で呼ばれている。

「スローマン今日も遅いな」

「そうだよなあ」

やっとシールを貼り終わり扉の向こうに行こうとすると、ちらりとこつちを見た。その時スローマンが真つ青な顔をしているのが扉の閉まりかけの隙間から見えたような気がした。

「それじゃあ翔太いつものやつ言うよ」

「わかってるよ」

「さあ狩りの時間だ」

あの時のスローマンの顔はなんだったんだ。

狼達は弁当を取るために戦い始める。

俺と拓は、狼達を次々と倒していく。

「翔太、あいつ二つ名持ちだよ。たしか『狂戦士 バーサーカー』の二つ名の持ち主」

『狂戦士 バーサーカー』 ころじゃ有名な二つ名だ。

戦い方がいかれたような戦い型だからその二つ名がついた。

「せっかくだし相手しない？翔太」

「それもそうだな」

俺たちは『バーサーカー』の元へ向かおうとすると目の前で『バーサーカー』が一瞬でやられた。

「嘘だろ。バーサーカーがやられた」

バーサーカーを倒した男は、倒したにもかかわらずまだ攻撃をやめない。

「おい、お前止めるよ。ここは弁当を取るために戦う場所だ」と拓が言つとその男は

「じゃあお前が満足させてくれるのか」と拓に襲い掛かる。

俺は拓に応援に入る。

「誰だ！貴様は俺はこのガキと戦っているんだ」

「あいにく俺たちの二つ名は2人で1人の二つ名『右近・左近』なんでなあ」

「そうか。それじゃあ2人まとめてかかって来い」

「行くぞ、拓！！」

「おう、翔太」

俺たちはその男に向かい拳を繰り出す。

その攻撃を手で受け止めるとその男はそのまま、俺と拓を持ち上げ空中で投げた。

その後、男は俺たちを殴ろうとするがあいにく拓は空中戦、最強の力を持つ。

そして拓はその男の拳をかわし顔面に向かい蹴りを入れる。

その攻撃にひるんだ男は俺のほうに飛んできた拳を引っ込める。

男は唐突に拓の足を掴みそのまま振り回し始める。

俺はそれを阻止しようと近づくとき吹き飛ばされてしまった。

その後男は、拓の首を絞めてそのまま上に待ち上げる。

「うううう・・・う」と拓がかすれた声で何か言おうとしている。

「しょ・・・しょう・・・しょうた・・・げろ」

その声はかすれてほとんど聞こえない位の大きさだった。

「やめるー！！！！！！」

俺の声はむなしく何の意味もなかった。

その時、俺の中の何かがぷつりと切れた。

その瞬間、俺は意識を失う。

その後、俺が起きた時には、周りに狼達が倒れていた。

後でそこにいた、狼に話を聞くと俺は、意識を失った後、あの男を
あともう少しまで追い詰めたらしいがそこで倒れたらしくその時に
周りのいた狼も巻き込みながら倒していったらしくその時俺は、周
りの狼から『狼殺し ウルフスレイヤー』と呼ばれるようになった
らしい。

拓はその時のショックによりスーパーにはこなくなった。

そしてあとで知ったのだが俺らがその時戦った狼は、この地区で最
強とまで呼ばれた狼『絶望 ディスペア』の二つ名を持つ狼だった。

「まあこんな感じで俺が『狼殺し ウルフスレイヤー』と呼ばれる
ようになったわけ」

「なんか、翔太も向こうで大変だったんだね」

何かみんなちよっと暗い感じになっている。

「そんな暗くなるなって」

その後何分か沈黙が続いた。

「俺さあバカだから、拓の奴をスーパーに戻ってこさせられなかった。そしてあいつも倒せなかった。でも今回は違うちゃんとあいつを倒して俺に自信をつける」

そう俺が言つと皆が「はあっ?」「見たいな感じになっている。

「だってさあこの状況、あの時に似てるんだもんだからコレを乗り越えれば、拓に一歩近ずけるきげするから」

そついうと皆納得した様子になった。

「それじゃあ弁当食べますか」

そついうと皆が「うん」って

まってるよ。拓、必ずお前をもう一度スーパーに連れてきてやる。

そして『ディスプレイ』お前は必ず俺が倒す

第5話 狼殺し（後書き）

次回予告

次回予告担当の白粉です。

今回もすごかったですねえ。

今回はサイトウが次回ついに

次回 訪問者

「サイトウガンバレ」

こんな感じでどうでしょう。

キャラ紹介（前書き）

今回はキャラ紹介をしたいと思います。

次回に訪問者はやりますので。

それではどうぞ。

キャラ紹介

名前：水川 拓

二つ名：『右近・左近』（翔太と2人で）

容姿：前髪は眉毛くらいで後ろ髪は肩くらいにかかっている。基本おとなしい性格をしている。

性格：翔太と同じように誰とでも友達になれる性格で翔太の最初の友達である。

家族：今のところ不明

交友関係：烏丸 翔太 バーサーカー

二つ名の由来：弁当を取る時、翔太と手を組みながら戦っていたため、左・右の名を持つ右近・左近という二つ名になった。

戦闘スタイル：基本拳と足を使うだが翔太と同じようにスーパーにある。物を何でも扱える。

好きなもの：弁当 仲間

嫌いなもの：特になし

現在は、翔太が暴走した日からスーパーには顔を出さなくなったという。

実際何故スーパーに顔を出さなくなったのか不明である。

決め台詞 口癖：「さあ狩りの時間だ」

名前：不明

二つ名：『絶望 デイスペア』

容姿：髪は短く、背は175くらいである。

性格：不明

家族：不明

交友関係：不明

二つ名の由来：そのものと戦ったものは、皆口をそろえてこう言う「地獄を見たようだった」とそのことから『絶望 デイスペア』の二つ名を持つ。この者と戦って無事だったのは今のところ、翔太だけである。

戦闘スタイル：不明（戦ったものが皆話そうとしないから）

好きなもの：不明

嫌いなもの：不明

この者は翔太に怨みを持っており、その理由は、やられたからではないらしい。

キャラ紹介（後書き）

次回予告

次回予告担当の？ハッピーです。（作者）

今回はあの半額神の過去が明らかに。

そして予期せぬ人物が翔太の元へ

次回 訪問者

言ってみたいですよねえこんな言葉

「さあ狩りの時間だ」

第6話 訪問者（前書き）

今回は、いきなり来てしまった、訪問者とかつて『オオカバマダラ』と呼ばれた、女性の話です。それでは第6話 訪問者をご覧ください。

第6話 訪問者

俺、洋が落ち着くと今回の弁当の成果をお互い確かめ合った。俺は獲ってないけど。

そして、温められた弁当がテーブルに置かれる。

「さて、次は佐藤の分だな」

「翔太はあの様子だと取ったようには見えないしな」

あやめにそう言われると俺は何も言えなかった。

「あ、僕は今日、獲ってませんよ」

そう洋が言くと槍水先輩が電子レンジの上に置かれていたレジ袋から何やら丼のようなものを取り出した。

「半額神からのお恵みだ。陳列する際に床に落として廃棄品扱いになっていたものだそうだが・・・まあ、食べてしまえば同じだろう。ありがたかったです」

そういつて手渡されたものは・・・争奪戦の前に見た、不可思議なあら汁だった。

その丼の中には、鮭、大根、ニンジン、里芋、キノコ、刻みねぎが入っていたがその中に俺の知らないものが入っていた。

そして俺が、槍水先輩に聞きかけた時、洋が変わりに聞いた。

「何です、この具の下にある透明なゼリーみたいなのは？」

「あれ？佐藤、翔太、知らないんだ？」

あやめが言うには、あら汁をゼラチンで固めたものだと言う。

「それじゃあ、ゼリー感覚で食べられるわけ？」

そう俺が言くとあやめが「うん」とうなずいた。

そうすると槍水先輩が俺と洋の丼を電子レンジに放り込んだ。

1分後

槍水先輩が丼を返した。

「最強つてことは魔導士よりもですか？」

「あくまで東区内でだな。ただこの麗人のように正規に申し込んできたものではなく、あくまで偶発的に出会い、そして行われた戦いだったと聞いている。ただ、あの人は昔からそうだったらしい。フラツと遠方の店に現れてはその縄張り所有者を打ち倒していくスタイルなんだ。美学なんだろう。二つ名を有する名つての戦士ではなく、あくまで一匹の狼であり続けようとした、と当時を知る者は語る」

「一匹の狼としてか」

その時、なぜか俺は拓の顔が浮かんだ。

「それで対決はどうなったんですか？」

白粉が興味津々というふうに見かねる。

「残念ながら私はその場に居合わせなかったんだが、凄まじかったと聞く。……まだ偶然居合わせただけなら良かったんだらう。」

問題はその時、最高の半額弁当を示す月桂冠が出たしまったことだ。当然、月桂冠が出た以上誰しもがそれを狙う。当然、魔道士との真正銘の直接対決になった。どのような戦いが行われたかは……わからない。彼女も魔道士も、そしてその場に居合わせた狼でさえ全員が今に至るまで口を閉ざしている。まるで自分たちだけの宝物だというかのように、尋ねれば誰しもが笑顔で”凄かった”とだけ返すんだ。

……対決は魔道士が月桂冠を獲った。だが……その夜、路上で倒れているところを発見され、手当てを受けている。近くに空の弁当の容器が落ちていたそうさ」

「はっ？」俺らは口をそろえていった。

「これは本人から聞いたんだが、どうも家や部屋に帰るだけの体力が残っていなかったそうさ。それで薄れゆく意識の中で弁当だけは残すまいと、路上で倒れたまま食べきつたらしい。その戦いから少しして、彼女は学生結婚し、一線から身を引いた。そして……新設されたこの店の半額神となったんだ。若いながらスーパールの知識

と経験のある人だからな。しばしの研究の末、この店の名物となるザンギ弁当を開発して、一躍有名になった」

「あのーさつきからずつと気になってたんですが、そのザンギ弁当ってなんですか？」

「俺も気になってたんですよ」

そう俺が言うと

「それはね」と女性の声がした。扉のほうを見てみるとマっちゃんだった。

「濃いめの下味を付けた鶏の唐揚げのこと。ワタシの生まれは北海道なんだけど、ここでは給食に出るくらいメジャーな料理なの。よかつたら今度狙ってみなさい。味は保証するから」

あやめがクスリと笑った。

「とはいっても、ほとんど残っているのを見たことがないけど。残った時もさ、必ず月桂冠じゃん。獲ろうとは思ってもとれないって」「へえーそんなに旨い弁当なのか、それは是非とも食わせてやりてえな」

「さて、そんじゃ、ぼちぼち送るわよ。あんたたち未成年なんだから。さつさと寝なさい」

俺たちは、アパートが近くにあるあやめと別れ、槍水先輩、白粉、洋と共にマっちゃん自動車の元へ向かう。

「全員シートベルトを締めなさい。後部座席もきちんとね。これ、基本ルール」

車に乗っていると洋がいきなり。

「何でマっちゃんという名で呼ばれているんですか？やっぱ二つ名から来てるんですか？」

「うーん、二つ名から来ていると言えば来ているし、そうじゃないといえばそうじゃないんだよね。ワタシの旧姓って松本だから子供の頃からずつとマっちゃんってあだ名だったし。っていつても今の姓も松葉だから、マっちゃんなんだけどね」

「二つ名は何と？」洋が聞くと

「『オオカバマダラ』カナダからメキシコへ大移動する蝶の名よ。ワタシってどこの店って決めずにちょこちょこ出歩いてたし、髪の毛見ての通りマダラな模様になっちゃてるから、そのへんから来たみたい」

そんな話をしながら車は進んで行き俺は車から降りた。

「ありがとうございます」

「気よつけて帰りなさい」

「じゃあまた明日学校で洋、先輩、白粉」

そう俺が言つと車は発進していった。

俺は家までの道のりをちよつと歩いている時、一人の男とすれ違つ、その男はすれ違いざまに俺に何かを言ってきた。

その言葉は、はっきりとは聞こえなかったが、一部は聞こえた。

その言葉は。

「奴のようにしてやるよ。お えも」

その言葉を聞き後ろを向くと誰も居なかった。

「まさか、あいつがこの町に居るわけないよな」

その時、俺はあの時の男の顔が浮かんだ。『ディスプレイ』の顔が。

第6話 訪問者（後書き）

次回予告

次回予告担当の佐藤 洋と烏丸 翔太です

まさか、翔太があんなことをするなんて

俺、なんかしたか？この話基本的に小説のままだから洋の変態感しか出てないぞ

なにを！僕は変態じゃない

こんなことやっても拉致が明かない。だから次回予告

今回はあの人が烏田高校に来るよ

どうせあや「言っちゃダメだよ翔太」

次回 拉致？

それじゃあ行くぜ、決め台詞

「さあ狩りの時間だ」

第7話 拉致？（前書き）

今回は洋たちのクラスにいる怖い人の話。
それでは第7話 拉致？どうぞらんくください。

第7話 拉致？

俺はいつものようにHP同好会の部室の扉を開いた。

そこには、普段見ない俺のよく知る人が居た。

烏田高校の制服を着たあやめがそこには居た。

「おう！翔太じゃん一緒にトランプでもやる？」

「トランプでもやる？っじゃねえよ。何でお前がここにいるんだ」

そう俺が言つとあやめは「この制服を返しに着たんだ」

「返しにきたんだって？お前帰り裸で帰るきかよ」

裸で帰る！！俺はその言葉に反応し口を滑らしてしまった。

「是非！！是非とも裸で帰ってください！！！！！！」

その言葉に周りのみんなは凍り付いた。あの洋でさえも。

しまった！やってしまった。後悔下頃にはもう遅かった。

何か！打開策を考えなければ。そうあせった俺は苦し紛れの言い逃れを言うしかなかった。

「別にお前の裸が見たいとかじゃないから！！決して下心ないから！！！！！！！！！！」

俺がそう言つと洋が俺の肩をポンと軽く叩いて言ってきた。

「人間誰しもそう言う面はあるだがこれだけは、言わせてくれ・・・

・・・変態・・・」

変態に変態って言われた。俺は洋に言われたことがショックでしようがなかった。

「まあ別に裸で帰つてもいいけど、昨日佐藤に貸した制服もあるしそれ着て帰るから」

そう俺をホローしたのかホントの事を言つたのかはわからないがとりあえずあやめの顔は真つ赤だった。

「佐藤、烏丸は昔からあんな奴だったのか？」

「いいえ、僕が知る限りそんな奴ではありませんでした」

そんな、俺が訳も分からない状態になっているとき部室の扉が開い

た。

そして、白粉が入ってきた。

「……あ、どうも、こ、こんにちは」

白粉がそう言うにあやめは「おっす」と返した。

「あの、先輩。梅ちゃんか部の予算の増減が認められたから、なんか申請書にサインするように、って言っていました」

「ああ、そういえばそんなものもあったな。わかった、後で行ってくるとしよう」

俺はそこからほとんど意識がもうろつとしていた。

所々あやめの声といやがる白粉の声、そしてたぶんただ見てるだけであろう洋と槍水先輩の声

その声が聞こえる中、俺は机の上で延びていた。

そんなニギヤカな会話が急に途絶えた。

俺はもうろつとする意識で扉の方を見ると白梅があやめを部室の外へ連れ出していた。

「なにがあったんだ!？」

洋が言うには、白粉をからかいすぎてそこにちょうど申請書のサインをもらいにきた白梅が洋を平手打ちし、その後あやめをさらっていったという。

「それは、あやめ気の毒に」

あやめが拉致された数時間後

「俺、今日もう返ります」

「何で急に?」っと洋が聞いてくる。

「今日は疲れたし何せ精神的ダメージがデカすぎる」

「それもそうだね」

何故だろう。洋に言われると腹が立ってしょうがない。

「それじゃあ、お先に失礼します」

「ああ、烏丸気よつけて帰れ」

俺は、槍水先輩の言葉に返事をするに部屋を後にした。

翔太家周辺

「はあー、今日はいろいろありすぎて疲れたな。やっべ飯、買ってないや。まあいつか家にあるもので作れば」

そんなことを口にしてしていると前から男の人が歩いてきた。

俺はあの時の男を思いだした。

俺はその男の横を通っていくとその男は何か言っていた。

今回は、ハッキリと聞こえた。

「明日の夜、貴様を倒し損ねた場所で待つ」

「倒し損ねた場所？」

俺が振り返るとやはりだれもいなかった。

「あいつは、いったい何者なんだ」

第7話 拉致？（後書き）

次回予告

次回予告担当の槍水 仙だ。

今回は、ついに帝王の計画が動き出す。
見物だな。

次回 決戦

第8話 決戦（前書き）

今回は帝王戦に入るところまで書きたいと思います。
それでは第8話 決戦どうぞ。

第8話 決戦

とある日の朝、俺は槍水先輩にとある公園に呼び出された。

朝5時半位に公園に來いと電話で呼び出され来て見るとそこには槍水先輩、洋、白粉がいた。

そして俺が来ると同時くらいに槍水先輩が「……そろそろ時間だな」というと周囲に無数の気配を感じ始めた。

「槍水先輩！これどういうことですか。ちゃんと説明してください」「大丈夫だ。この話を聞けばわかる」

そういうと周りにいた人々たちがしゃべり始める。

その説明を聞く限り帝王の狙い、動き、ガブリエル・ラチエツトがどういうものかとか、これから西区はどうしていくかなどを話していた。

そうすると洋が話の終わり際にこう言ってきた。

「……あのー、縄張りなんて持っていない僕のようなのはどうしたらいいんでしょうかね？」

「そうですねよ！俺も縄張りは持っていません。どうしたらいいんですか？」

その質問に槍水先輩は「ん？」と俺らの顔を見、小さく微笑む。

「私は縄張りを二つ有しているわけだが、お前と白粉、烏丸にはアブラ神の方を任せようと思う」

そう槍水先輩が言うのと周りにいた狼たちが「魔女の縄張り一つを、か。」「大きな代役だ」「だが、あそこには狼殺しの『ウルフスレイヤー』が居るから大丈夫だろ」「魔女はそれでいいのか」「構わんさ。……さて、こんなところだな。あとは各自、いつも

のように戦い、いつものように奪い、いつものように喰らうとしよう

う。ここににいる者同士ぶつかり合うこともあるだろうが・・・お互い全力でいこう。手加減も遠慮もいらん。まあ、言うまでもないか」「なんか面白くなってきた、そうこなくちゃ」

「よし、ではこれにて解散を」

槍水先輩の言葉を、ちを這うような低い声「・・・だが」と言う声があつた切った。

その声のした方を見ると一人の男が立っていた。

「そいつの言うことはもつともだ。果たしてそれで勝ちとなるのか。ふざけ半分で作ってくる東区の連中を打ち負かしたところで、あの男は何とも思わない。・・・かつて戦った時は、そう言う奴だった」そこにいたのは、最強と呼ばれる狼「魔術師 ウィザード」の姿だった。

「俺に、守るべき縄張りはない。今回の一件も・・・あの男に彼女の名を持たせておくのも、いい加減不愉快だ。俺が引導を渡してやる」

そういつて『魔導士』は霧の中へ姿を消していった。

「・・・佐藤、白粉、烏丸、部室に戻ろう」

半値印証時刻の前俺は洋に電話をした。

「俺、そっちのスーパーには行かないや」

「どうしたんだよ。翔太」

「理由は聞かないでくれ。じゃなあ」

「ちよつとまって！しょ」俺は洋の言葉を無視して電話を切った。

俺は東区のマツちゃんがいるスーパーに急いだ。

「たぶん、俺の読みが正しければ魔導士はあのスーパーにいる」

俺は、自転車を猛スピードでこぎスーパーまで急ぐ。

俺がスーパーに来たときには魔導士が血を流していた。

「魔導士!!!大丈夫か!!!」

「来たか!『ウルフスレイヤー』貴様もつぶしてやるよ」

「帝王!!!俺はお前だけは許さない!!!!!!」

その時、このスーパーの半額神であるマっちゃんが現れた。

その光景を見て驚いていたようだ。だが彼女は、残り4つの弁当に半額シールを貼っていく。

そして、ザンギ弁当に月桂冠のシールを貼り終わると悲しげな顔をして扉の方に行き、閉まり行く扉を振り返り「・・・ごめんなさい」と呟いた時、彼女の潤んだ日地味に何かが映る。彼女は「あれは!」
といい扉が閉まっていく。

そして彼女の見ていた方を見ると俺のよく知る二人がそこには居た。
洋とあやめの姿が。

「洋!!!あやめ!!!何で」

そう俺が言つとあの二人は「帝王をぶっ潰しに来た」

「お前等もか!洋、わりいなさつきはお前を危険に巻き込みたくなかったんだよ」

「わかってるって!それじゃあいくよ」

洋とあやめは帝王の元へ向かう。

「それじゃあ俺も行きますか。あの台詞言ってから」

「さあ狩りの時間だ」

俺もそう言つと帝王に向かっていく。

魔導士も帝王の元へ向かう。

こうして帝王戦の幕が開けた。

第8話 決戦（後書き）

次回予告

次回予告担当の烏丸 翔太です。

ついに始まった帝王戦、帝王の強さに俺たちは圧倒されてしまっただけど俺たちは負けないけどね。

次回 終戦

次の話の内容で2巻の内容は終了します。それじゃあ、決め台詞いきますか。

「さあ狩りの時間だ」

第9話 終戦（前書き）

今回は帝王との戦いが終わります。（2巻終了）

そして、翔太がまたもあの力を使うかどうかお楽しみください。

それでは第9話 終戦お楽しみください。

第9話 終戦

「さあ狩りの時間だ」

ついに始まった『帝王 モナーク』戦

俺はその光景に唾然としていた。

帝王はタンクをまるでおもちゃを振り回すように使いこなしているからだ。

その光景を見て洋は恐怖で足がすくみ動かなくなっていた。

だがあやめが洋の手をつかんで「怖がるな、佐藤、もしもの時はアタシがいる！アタシが守ってやるよ！」

「そうだぜ洋！俺だってお前を守ってやるよ。そしてあやめも守ってやる」

そう言い俺は向こうで激しく戦っている魔導士と帝王の元へ行く。

魔導士は深手をおいながらも帝王の操るタンクを手などを使い止めている。

だが魔導士がやられるのも時間の問題だ。

魔導士は帝王のタンクの攻撃を腕や手を使い受け止めているためダメージが蓄積されていく。

だが帝王はタンクを使っているためダメージはほぼ無い。

「どうした、魔導士、さっきまでの威勢はは何処に行った!？」

後ろの方にいたあやめと洋も今動き始めた。

「おれを倒すんじゃないのか!？潰すんじゃないのか!？やってみせろ、最強よ！」

俺は帝王の手に向かい拳を繰り出した。だがビクともしない。

そしたら、あやめがタンクに洋が帝王の腹に向かい攻撃を加える。

それによりタンクを離すことは成功したが吹き飛ばすことはできなかった。

俺たちは魔導士の前に彼を守るように立つ。

「・・・よく、来たな。奴は・・・豚だ。潰すぞ」
「はい！」

「残念だな、魔導士。加勢にきたのはお飾りの二つ名と、名無しの新人、怒らなければ敵ではない二つ名持ち。絶望的だ」

挑発に飛びかかろうとするあやめを魔導士が止めて

「そうだろうか。少なくとも俺には、頼もしき同志にしか見えない」
俺たちは3方向に分かれたあやめが右、洋が左、俺が空中へとそして魔導士が前進して帝王へ向かう。

すぐさま帝王もタンクを拾い迎え打つ。

洋とあやめが同時にけりを放つ。

「雑魚は寝ているお！」

帝王は洋の攻撃をかわし空いている手であやめの蹴りを掴み頭から床へたたきつける。

「てめえよくもあやめを！！」

俺は空中から蹴りを入れに行く。

その攻撃を帝王はかわすと体勢を立て直して攻撃している洋へタンクで襲いかかっていた。

洋は吹き飛ばされていった。

帝王は掴んだままのあやめを魔導士の方へ投げた。

そしてそのままタンクを魔導士とあやめがいる方にふりおろす。
魔導士はあやめを庇うようにしてあたまたんクが激突した。

その瞬間、洋が雄叫びをあげながら帝王の右腕へと迫っていた。

その攻撃は、帝王にかわされて洋は胸ぐらをつかまれた。

「死角から仕掛ける時はさつきを消せ。バカめ」

そして洋は床にたたきつけられた。

そして洋はまた上に上げられて床に叩きつけられそうになったとき何とか回避した。

「やっと本気を出す時が来たみたいだな」

俺がそう言つと帝王はあざ笑ってきた。

「本気を出す？また暴走するつもりか？」

魔導士はタンクを使い帝王に向かっていく。

「お前にタンクは無理だぞ、魔導士、見よう見まねでなにができる！」

そして帝王が魔導士のタンクを止めると、魔導士の背後からあやめがでてきて帝王の顔面に蹴りを入れた。

帝王はタンクから手を離しあやめの拳をつかみ投げ飛ばした。

「どうした帝王、お前が未熟な駄犬と呼んだアタシの攻撃で、なんだそのザマは！？」

その挑発にイラだたせた帝王はあやめの元へ向かう。

その攻撃を横から洋が帝王に攻撃を仕掛けたが帝王は体の向きを回転させて洋の方へ攻撃を仕掛けた。

「ふうーあぶないぜ！！洋」

その攻撃を俺は片手で手でとめた。

その行動にそこにいた誰もが驚いたようだ。

「だから言っただる本気を出すって」

魔導士も驚いたようだがその後普通に

「来いパットフット。全力を出せ。そして、言い訳ができぬほどに負ける．．それとも、もう限界か？」

「黙れ！」と帝王は俺と魔導士の方に向かってくるかと思ったら半額弁当の方へ行った。

「ラチエット」

帝王がそう叫ぶと俺たちはちよつと吹き飛ばされた。

そして洋の元へ見たことのある人物が居た。それは洋を助けたピアスの男だった。

「洋！ここは任せたぞ」

そついうと俺たちは帝王の帝王の元へ行く。

「魔導士！ここからは俺は手を基本的に出さない。ピンチの時とかやられそつな時になつたら行く」

「ちよつと翔太！あんた何いってんの？」

「ここからは、俺は帝王と魔導士の戦いだと思ってる。だから」

そういつて俺は傍観者サイドとしてみていた。

帝王は洋、あやめ、魔導師が倒し魔導士は月桂冠ではなくすき焼き弁当をとっていった。

「それじゃあ俺は天井でも捕ってくわ」

「いつのまに翔太？」

俺が外であやめと洋の戦いを待っていると二人がでてきた。

「っでお前ら月桂冠はどっちが捕ったんだ？」

そうすると不満げな表情であやめが洋を指さす。

「そうか、残念だったね。あやめ、また今度がんばればいいじゃんか」

「ってかさあ！翔太さ、最後の方ずっと見てただけじゃん。なんで」

「ちよつと俺にも事情があつてさ。またいつか話すは。じゃあな」

そう行いて俺が帰ろうとすると二人が「「まって」「とிட்டた。」

「どうしたんだよ？」

「今日くらい一緒に食べない？」とあやめがいつてきた。

俺は思わず「おお・おう」と言ってしまった。

全員弁当を食べ終わるとあやめが洋の膝の上で寝ってしまった。

「それじゃあ俺ボチボチ帰るわ」

「それじゃあ翔太気よつけて」

第9話 終戦（後書き）

次回予告

次回予告担当の作者です。

今回は途中からバトルシーンをカットしていきましたがどうでしたでしょうか。

翔太が戦わないのならいいかなと思ってやりました。

前半もそんなに翔太のバトルシーン無いんですけどね。

そして最後にできた『バーサーカー』翔太の過去にちょっとだけできた人だよ。

そしてなぜ今回翔太が戦うのをやめたのかそれも今後の話でわかるので期待してください。

次回 オルトロス

ついに3巻突入！！

第10話 変態と狂戦士（前書き）

今回は前回の予告でオルトロスと書いたのですが小説を見る限り1話で行くのは無理と言うことでサブタイトルを変えました。今回の内容は佐藤に二つ名が付きます。そして翔太の旧友『狂戦士 バーサーカー』がついに登場。

それでは第10話 変態と狂戦士お楽しみください。

第10話 変態と狂戦士

帝王戦が終わり俺が家に帰るとき意外な人物にあった。それは俺が引越した先にいた二つ名を持つ男だった。

「バーサーカー！！！！！！」

「烏丸！！！！！」

俺とその男、バーサーカーはお互いに名前を呼びあった。

「何でお前がこんな場所にいるんだよ！」

俺がそう言つとバーサーカーは

「お前こそなんているんだよっ！」と言り返してきた。

「俺はここらに引越してきたんだよ！」

そう俺が言つとバーサーカーも「俺もだ」っといつてきた。

その後俺たちは昔の話をしながら一緒に帰つてた。

数日後の部室

「はあああ・・暇ですね。先輩」

「まつたくだ」

そんなことをいいながら俺と槍水先輩はオセロをやっていた。

「今日は洋はどっか行つたし、あやめは来ないし、白粉にいたつては居ても居なくても変わらないし」

そんな話で俺たちは時間をつぶしていた。

「はあああ今回も全敗かよ。先輩強すぎますっつて。」

「まあな」と先輩とそんな会話をしていると電話がかかってきた。

「すいません先輩ちよつと失礼します」

俺はそのまま電話にでると相手はバーサーカーであった。

「どうしたんだよ。バーサーカー？」

「いやちよつと久しぶりにお前と戦いたくてさ、今日は何処のスイ

パーに行くんだ？」

「ちよつとまってよ」

俺は携帯から手を離し槍水先輩に今日どこに行くのか聞いた。

「今日はスーパーときわに行くつもりだが」

「ありがとうございます」

俺は携帯を手に取りバーサーカーとの話を続けた。

「おうもしも今日は東区のスーパールのラルフストアにしよう」

「おうわかった。じゃあな」

「おう」

そう言つて俺は電話を切った。

「何の電話だったのだ？」と先輩が聞いてきた。

「昔の友達がここに引つ越してきてそいつが俺と戦いたいって言うから場所を決めてたんです」

そう俺が言つと先輩が「場所は何処にしたんだ？」と聞いてきた。

「場所は、ラルフストアにしました」

「そうか、がんばつてとつてこいよ」

俺は先輩の言葉に「はいっ！」と返事して部屋を後にした。

ラルフストア

「はああやつと着いた。結構遠かったな」

そんなことを言つてしていると俺の目の前に洋とあやめがいた。

「おう！お前等も今日はこのスーパーなのか？」

そうすると二人は「うん」とうなずいた。

俺らが話していると一人の男が俺らに声をかけてきた。

「帝王を倒したのもお前だと聞いている。最近、随分と名を売っているようじゃないか」

その男は以前ちよつと戦つたことのある手にかごを持ち独特の戦い方をする男だった。

「その内の一人さ。けれど僕だけじゃない。それに・・・僕には売

れるだけの名なんてない」

「俺はお前の二つ名を耳にしてるぞ。・・ははあ、そうか、まだ当の本人は聞いたことがないってわけか。よくあることだな」

俺は内心ものすごく笑っていた。

まさかデジャブが起きるなんて気の毒だよ、洋

「なに？・・僕に、二つ名が？」

洋はその男を見上げていた。

「聞きたいか？」

「と、当然だ、教えてくれ」

その時の洋の顔は期待したような顔をしていた。

あとの顔が楽しみだ。

「『変態』だ」

「よし落ち着けジヨニー」

「誰がジヨニーって？」

俺はもう笑いそうになっていた。

「何だよ！何でそんなわけのわからない二つ名がついてるんだよ

！今の流れは絶対”愛してる”とか”前からずっと好きだったんだ

”とか、そういう流れになるだろう！？」

俺はも耐えきれなかったのであやめに「あやめ俺はこれ以上こいつ

のそばにいと笑えてくる。それだから俺は向こうの方に言っ

ている」というとあやめも半笑いで「了解！」といった。

「はあーおもしろかった」

そんなことを言っていると誰かが入店してきた。

その男は帝王の下にいたピアスをつけた男かつて『ガブリエル・ラ

チエット』と呼ばれた男だった。

「よう。お前とまともに話すのは初めてだったな」

そうすると相手も「そうだったな」といつてきた。

「お前等が洋にやったことは俺は許す気はない。だがお前は洋を助

けてくれた礼は言っておく。ありがとな」

そんな話をしていると洋が俺らの元に来てピアスの男に「話がある」といつてきた。

「僕が何やら変態という珍妙な二つ名で呼ばれているんだが、何か知らないだろうか」

「・・・オレは事実からお前をそう称したまでだ」

「ってかお前だったのか洋に変態の二つ名をつけたのは」

その時、スーパールの扉が開き俺が待っていた人物が来た。

「やっときたかバーサーカー。おせえよ」

「わりいな、ちょっと道に迷ってってか何で二階堂がここにいるんだよ」

「それはこっちの台詞だ。なぜお前がここにいる。東雲!!」

「それはだな」

「そんなことよりもう半額神でできたから話は後だ」

俺がそう言つとみんな狼の目になっていた。

半額神がシールを全て貼り終える。そしてスタッフルームの扉を開けて戻っていく。

そして半額神がこちらをちらりと見て扉がパタンとしまつていった。その瞬間一斉に狼たちがでてきた。

「それじゃあいつもの台詞言いますか」

「俺も言うか」とバーサーカーも言っていた。

「さあ狩りの時間だ」

「戦闘開始!」

俺とバーサーカーは同時に弁当コーナーへ向かう。

その間にバーサーカーが次々と狼たちをなぎ倒していく。

「さすがバーサーカー。やっぱあいつめちやくちや強い。まともに相手できるかな」

そんなことをつぶやきながら俺は弁当コーナーへ向かう。

その時俺の前にジョニーが立ちはだかった。

「俺と戦おうってか。上等じゃねえか！かかって来いよ」
そういうとジヨニーは俺の元へ来る。

そして俺にかごで攻撃しようとした時、何者かに飛ばされてしまった。その人物はバーサーカーだった。

「俺をさしおいて、烏丸と戦おうとするとはいい度胸だな」
やばいやつが俺の目の前に立ちはだかった。

「それじゃ始めるか。烏丸」

そう言うたバーサーカーは俺に拳を繰り出してくる。

それを俺はかわすとあることを直感に感じた。こいつの攻撃を喰らったらまずいと。

その攻撃をかわした後俺はバーサーカーの横にまわり拳を入れて、後ろにまわり拳を入れた。

その攻撃が効いたらしくバーサーカーは、ちよつとよろめいた。

その隙をねらい俺は、弁当を取りに行った。

だが、俺の前にまたも立ちふさがる者がいた。それはあやめだった。
「あやめそこを退いてくれるとうれしいんだけど」

「だめに決まってるだろ」

そう言うたあやめは俺に蹴りを入れてくる。

俺はその攻撃を跳んでかわすとそのままあやめの肩をつかみアクロバティックな動きであやめの後ろに立つ。

「すまないな。あやめ」

そういつて俺は残っていた弁当丸得のり弁当を手にした。

俺が弁当を取ると戦いは終わりその中で気になるものが一人いた。
かごを頭に乗せて四つんばいの生物がいた。よく見てみると洋だった。

「洋！お前が『変態』って呼ばれる理由がわかったか」
洋は悲しげな顔で「うん」といった。

黄昏空がHP同好会の広い部屋を朱に染めていた。

俺が部室に入ると何故かあやめとあせびちゃんがいた。

そしてあやめと先輩はテレビゲームをやっていて、洋は無駄に汗をかいていた、そしてあせびちゃんは洋を心配そうに見ていた。

「すいません、状況が全く読めないんですが」

「まあ気にすんなって」とあやめは言うが普通気になるだろ。

俺はあやめと先輩がやっているゲームをただただ見ているだけだった。

「・・・佐藤、このゲーム、おかしいぞ。私の攻撃が一発も当たらない」

「先輩、言うのが少し遅れましてけど、そのゲームで著莪に勝のは正直無理かと。当時全国大会に出場していた親父と対等に戦える腕なんで・・・」

「あゝ、気持ちいい。さつきまで散々人をコケにしていた奴を倒しちゃうのって。まあ10年早かったね、魔女さん」

そういうとあやめが席を立つ。

「あっちもやる〜」

そう言うとおせびちゃんが席に座りやり始めた。しかも強い。

「著莪、説明を」

「アイツさ、ゲームショップでバイトしてるの知ってるよね？以前見に行ったらレジやっているか、客と一緒にゲームをしているかのどっちかで、相当な腕前になっているんだよ。客寄せになるらしいから店長とかはむしろ勧めているらしいんだけど。専門はカセット時代のレトロゲーム、でもSSも相当やり込んでいるから、かなり強いよ」

あやめの話の聞いていると先輩から「烏丸！」という声が聞こえてあせびちゃんの席を指す。

「俺もですか？」

そういうと先輩は「うん」という。

俺は席についてゲームをした。

結果は勝った。

そうすると俺の時と同じように次は洋を指名した。

洋もゲームをして先輩に勝つと先輩は洋に質問をしていた。

「佐藤、質問なんだが、このゲーム機とソフト、いくらくらいする？」

「えつと・・・中古市場ならあわせて4000円するかしないくらいですかね。でも何故？」

何故そんなことを聞いたのか俺も疑問に思っていると先輩が「そうか」とつぶやいた。

「井ノ上だったか。ちよつと窓を開けてくれないか。空気を入れ換えよう」

そうするとあせびちゃんが「は〜い」といい窓を開けると先輩がSSの電源を切るとコード類を抜き、そつと本体を持ち上げた。

「あの、先輩？」

「佐藤、すまん。手が滑っている」

この人は何を言っているんだ。

「げ、現在進行形!？」

先輩はそのまま振りかぶりSSをぶん投げた。

そうすると洋が「僕のサターーーーン!？」とやって床を蹴り窓の外にダイブした。

「洋!ちよつとお前何してるんだよ」と俺が言ったとき足を滑らして俺もそのまま下に落下していった。

その瞬間、俺は確信した俺は死ぬと。

目を覚ますと、どこかのベットの上にあった。

「こ・・・ここは」

俺が起きあがるうとするとそこにはあやめがいた。

「だめだつてまだ起きたらあんたは佐藤と違って重体なんだから」
「はあくそうかってこと洋は無事なのか」

俺がそういうとあやめは「うん」といった。

「ちよつとアタシらは、弁当取りに行つてくるから。ちゃんと安静にしてなさいよ」

「わかつてるつて」

そういつてあやめは部屋からでていった。

「やべく弟たちの飯がないな。ちよつと連絡でもするか」

そういつて俺はアイツに電話をした。

「あつもしもしバーサーカーか。ちよつと頼みがあるんだが」

「頼みつて何だよ？」

「お前が今日、手にした弁当俺の弟たちに分けてやってくれよ。さいやくなんか買つてきてくれよあとで金は払うから」

「わかつたよ。しょうがなえな」

「サンキュウなじゃあ。またいつか」

そういつて俺は電話を切った。

そして俺は眠りについた。

ふと起きると俺の病室に誰がいる。

先輩でもあやめでも洋でもないだれかがいる。

「あの〜」というと相手はビツクとしてこちらを振り向いた。

そこには年が若くて銀髪の長い髪の看護婦がいた。

「どうしたんですか。俺の病室で？」

「いえ、何でもないですよ」

「じゃあ、なんで俺の病室にいるんですか？」

そう俺が言つとその看護婦は「そうでしたわ、包帯を取り替えに来たんですの」

「そうですね。それじゃあお願いします」

そう言うとは故かいつたん病室を出て行ってまた戻ってきた。

「どうしたんですか？」

「何でもありません。それでは、少々身体を測らせてもらいます」

「は・はい。わかりました」

そういうとその看護婦は俺の身体の長さを測り始めた。

右手、身体、右足を測ると次は俺の身体をまたいで左手、左足をはかり始めた。

思いつきり胸があつてる。

この時間がずっと続けばいいのになあ。

そして、看護婦は、測り終えたようでもまた出ていき、又もどって来た。

「さつきからどうしたんですか。あれ？」

俺はちよつとした疑問点にきずいた。

さつき来た看護婦は後ろは短かったのに今来た人は長髪である。しかも少し胸の大きさが変わっている。

「あのくすいません」

「なんですの？」

やっぱりしゃべり方も少し違う。

「いえ、何でもありません」

「それでしたら、包帯を入れ替えてもよろしいですか」

「はい！」

チャンスがまた来た。

看護婦はそういうと俺の包帯をとり始めた。

俺は、その看護婦の身体を見ると少し傷があつた。その傷は最近できた傷であつた。

そして俺は直感で思ったことをいってみた。

「俺になんか用があつたんですよ。狼さんよ」

その言葉に少し動揺した後「何のことですか？」と返してきた。

「俺の用があつたんですよ。この『狼殺し ウルフスレイヤー』に俺がそう言う相手ももう隠せないと思つたようその場から立ち

去ろうとした。

俺はその看護婦に「お前等も狼なんだろ！もう一人もつれていつか戦おうじゃないか」そう俺が言うと。

その看護婦は去り際に「面白い人ですわ！」と行って去っていった。

「また、新たな狼の登場か。俺も早くこのけが直さないとな」

そういつて俺はまた眠りについた。

第10話 変態と狂戦士（後書き）

次回予告

次回予告担当の二階堂 連と東雲 壊破だ。

今回はなんかいろいろありすぎだったな二階堂。

というかなぜ俺とお前でやらねばならんのだ。

まあいいじゃねえかよ、そんなことより次回予告をしないと。

まあそうだな今回はオルトロスという双子の狼の話だ。

そして烏丸は復活できるのか。

次回：オルトロス

それじゃあ決め台詞いおうぜ二階堂

知らんオレは帰る。

まてよ二階堂。

それじゃあ俺だけでいくぞ

「戦闘開始！」

ちよつと待てよ二階堂

第11話 オルトロス（前書き）

今回はオルトロス戦の第1回目までの内容について書きたいと思
います。

それでは第11話 オルトロスをご覧ください。

PS：前回バーサーカーの翔太の呼び方が統一されていなかったん
ですがバーサーカーの翔太の呼び方は烏丸です。

第11話 オルトロス

俺はまだ病院のベットのの上にいた。

「それにしても、病院がこんなに暇だとは思わなかった」

俺は暇すぎるため洋に電話をかけてみた。

プルルルル……

ちよつとすると洋が風邪気味の声で電話に出た。

「はい、どうしたの翔太？」

「俺は暇だからかけてみただけ。お前こそ何か声、風邪っぽいぞ」

「うん、ちよつと風邪引いちゃって」

「お前も災難だな。5階からダイブして病院送りでその次は風邪かよ。まあ俺が言える事じゃないけどな」

俺も5階から落下して現在入院中だしな。

「あれ？誰か来たみたい、だからそれじゃあ」

「ああ、また学校かスーパーで」

そう言つて俺は電話を切った。

そしてしばらく時間が経つと俺のいる病室に訪問者が来た。

その人物はバーサーカーだった。

「あれ？バーサーカー何してるんだよ。こんな所で」

「お見舞い来た人に言う言葉かよ。せつかく弁当、取ってきてやったのに」

「俺よりもそれなら弟たちにやってくれよ」

「もう、お前の弟たちには飯を食わせてきた。だから心配するな」

「へえ、サンキュウなバーサーカー」

俺がそういうとバーサーカーは呆れたような顔で俺に向かい言った。

「あのなあ烏丸、お前俺の本名知ってるか？」

「そついやあ、知らねえや。なんて言うんだよお前の名前？」

俺がそういうとやつぱり呆れた顔で俺に言う。

「俺の名前は、東雲 壊破っていうんだよ。ちゃんと覚えとけよ」
「ふう〜ん、わかった」

「お前、覚える気全くないだろ」
そういうとバーサーカーは「それは、さておき」と言い本題に入る
みたいな感じで言ってきた。

「烏丸！俺がお前の病室に入るとき不審な人物がいた。たぶんその人物はここにいる」

そういうとバーサーカーは病室の扉を開けた。

そうすると2人のナースが病室に倒れ込んだ。

「来いらだ。お前の病室の前にいた不審な人物は」

バーサーカーはその2人を捕まえると俺の方につれてきた。

「バーサーカー大丈夫だよ。その2人は怪しい人じゃない。俺の友達だ」

俺がそういうとバーサーカーは不審そうに俺に質問してきた。

「友達？じゃあ何でナースの服を着てるんだ？」

「それは、とてもシャイだから普通の姿でお見舞いに来るのが恥ずかしかつたんだろ。そうだよなっ！」

俺がそういうと2人も「え・ええそうです（そうですわ）」と言った。

「まあそれならいいか」

バーサーカーは2人の捕らえるのをやめた。

「バーサーカーちょっと席を外してくれないか。来いらと話がしたいんだ」

バーサーカーはないも言わずに病室から出ていった。

その後メールで「ちょっとお前の家まで行った来る。絶対に俺の弁当を勝手に食うなよ」というメールが来た。

「さてと、何でお前たちがいるんだよ。てかお前たちは、誰なんだ！」

俺がそういうと長い髪の方が自己紹介をし始めた。

「わたくしは沢桔 梗こっちは妹の沢桔 鏡と言います」

「あれ？同じ名前？」

自然と口から漏れた俺の問いに梗は答えた。

「漢字は違います。わたくしは明智 光秀の門であ桔梗のキヨウ、妹は鏡と書いてキヨウと読みます」

「へえ〜で俺に何か用があつて来たんだろ？」

姉である梗が「実は・・・」という何か重めの空気で話し始めた。

俺はその空気に不信感を覚えながら話を聞いた。

「実は・・・」

なんか「あなたのことが前から好きでした」とでも言つかのように間を空ける。

「実は・・・もう一度あなたの身体を測らせてください」

「へえ??？」

俺は意味が分からなかった。

「ですから、もう一度あなたの身体を測らせてください」

俺が戸惑っているのと妹の鏡が「ちよつとタイムもらっていいですか？」と言ってくる。

「どうぞ」と俺が返すと何やらひそひそと話し始めた。

数分後

話がまとまったらしく今度は妹の鏡が話してきた。

「あなたのデータを調べてみたところ、ほとんどデータが無かった為、あなたの身体を測りたいと言っわけです」

俺はまだよく意味が分かってないが「そうですか。それじゃあどうぞ」と言ってしまった。

そうすると梗はメジャーを取り出し俺をベットに寝かせると俺の身体を測り始めた。

数分後

俺の身体を測るのは終わったらしく梗がメジャーをしまつて俺に向かい。

「ありがとございます」といって鏡も「ありがとございます」と言う。

俺は、内心ホットしていた。

あんな状況に後、数分いたら俺はどうかなったいた。

沢枯姉妹が病室から出ようとすると梗が立ち止まって俺の方に向かってくる。

鏡も「姉さん。どうしたんですか」と言い向かってくる。

梗は不思議そうな顔で「これはなんですか?」と指を指す。

それは俺のあきらかに肥大したあの部位であった。

それにきずいた梗は後ろに下がるうとする。

その誤解を解こうと動こうとするとシーツがズレて俺は床にベットから落下した。

「イテテテテ！大丈夫ですか沢枯さん」

俺はものすごくまずい状況にいた。

俺はベットから落ちたとき梗を巻き込みながら落ちていき今は俺が梗の上に乗りがかり今にも襲いますみたいな状況になっていた。

そして更なる悲劇が俺に降り懸かった。

俺の家に言っていたバーサーカーが帰ってきたのだ。

俺らの状況を見ると「お邪魔しました」と言い扉を閉めていった。

「おい！まてバーサーカーそんなんじゃ無いからな」

俺はそう言いながら梗の上から退くと梗はすぐさま鏡の元へ行った。

「鏡！どうしましょう。男の方とあんなことを」

「姉さん大丈夫です。これは不慮の事故ですから、あの方を見てください。もう土下座をしていますよ」

俺はこうするしかなかった。

男のプライドそんなもんとつくに捨てました。

「すいませんでした！！！！不慮の事故とはいえ本当にすいませんでした！！！！」

沢枯姉妹も俺の行為に驚いたらしく一様許してくれた。

そして何分か沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは意外にも梗であった。

そしてその言ってきた言葉に啞然とする俺だった。

「あ・・あの携帯は赤外線データ通信とかおできになる機種かしら？」

「へえ？ どういうことですか？」

「とりあえず交換いたしませんか」

俺は携帯を取り出し梗に渡すと赤外線交換をするとその携帯を妹の鏡に渡すと鏡は「わたしもですか？」と言つと「そうです」と梗が言う。

赤外線交換が終わると俺にその携帯を返すと俺に携帯を返した。

「それじゃあ、今度はスーパで会いましょう。沢桔さんたち」

俺がそう言つと訂正するように梗が言ってきた。

「梗でいいですよ。あなたも鏡でいいわよね」

「ええ、いいですよ」

「わたくしたちはあなたのことを何てお呼びになればいいのです？」

「俺ですか、烏丸でも翔太でもどっちでもいいですよ」

「それでは翔太さんと呼ばせていただきます」

そういつて沢桔姉妹は去つていった。

数分後

ニヤニヤした顔でバーサーカーが帰ってきた。

俺はそれを無視してバーサーカーの取ってきた弁当を喰つてその日は寝た。

次の日

俺はやつと退院できた、だが完全に直つた訳ではない。

俺が家でのんびりしているとメールが来た。

そのメールは梗から来たものだった。

「体の調子はどうですか？あなたと戦える日を楽しみにしております」

そのメールを見終わると俺は寝てしまったようだ。

起きた時には17時40分だった。

「まずい、アブラ神の店の半値印証時刻が始まっちゃった」

俺はあわてて着替えて家を出た。

後ろから「兄ちゃんどこ行くの？」と言う弟の声を無視して。

だが身体がなまっっているため走るスピードはものすごく遅くなっている。

結局アブラ神の店に着いたのは半値印証時刻がちょっと過ぎた頃だった。

俺が店にはいると目に飛び込んできたのは今にもやられそう槍水先輩の姿だった。

俺が弁当コーナーに着く頃には先輩はやられていた。

「わたくしたちを、追ってきてくださいまし。そして、必ずや、倒してくださいましね」

梗は笑うように、そして、どこか泣くような声で、言った。

「さあ、行きましょう。姉さん」

「ちょっと待てよ！！まだ俺が残ってるぞ」

そう言うところから沢枯姉妹は弁当を取るのをやめて俺の方を見る。

「翔太！！なんで翔太がここにいるんだよ。けがは？」

「安心しろ、大体は直った」

沢枯姉妹は俺の方を見て戦闘態勢に入った。

俺も少し前に出て戦闘態勢に入る。

後ろの方から狼たちがざわざわ何か言っている。

「まさか『狼殺し ウルフスレイヤー』と『オルトロス』の戦いが

「見えるなんて」

「でも『ウルフスレイヤー』はけがを負っている」
そんな狼たちの声を無視しながらいつもの台詞を言う。

「さあ狩りの時間だ」

こうして1回目の『狼殺し ウルフスレイヤー』VS『オルトロス』
の戦いが始まった。

第11話 オルトロス（後書き）

次回予告

次回予告担当の沢枯 梗と沢枯 鏡です。

ねえ鏡、氷結の魔女の次は翔太さんと戦えるなんて今日のわたくしはついていませんか。

ええそうですね姉さん、しかし気は抜いてはいけません。わかっていますわ鏡。ああ早く次の話になりたいですわ。

次回：風邪と離脱と格の違い

それでは決め台詞でも言おうじゃありませんか鏡姉さん。私たちに決め台詞はありません。

それでは翔太さんのを借りますか。いきますわよ

「さあ狩りの時間だ（ですわ）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7340z/>

ベン・トー ~ 狩人の名を持つ狼 ~

2012年1月6日17時52分発行